C・R・ホイッタカー『ローマ帝国のフロンティア』

Whittaker,C.R., *Frontiers of the Roman Empire : a social and economic study,* Baltimore : Johns Hopkins Univ. Pr., 1994, xvi+341p.

柴野浩樹

本書は、ケンブリッジ大学チャーチル・カレッジのC.R.Whittaker（以下W.と略記）による意欲作で、彼が一九八七年にコレージュ・ド・フランスで行った四回の講演をもとにしている。この講演のテーマはローマ西方のフロンティア（以下F.と略記）における社会的経済的変化に関するものであり、後に *Les frontières de l'Empire romain* (Paris, 1989) として出版された。今回新たに東方のF.をも議論に含め、いわば「決定版」として世に問うたのが本書である。W.はローマ経済史研究の分野ではイギリスで指導的立場にある研究者で、P.D.A.Garnseyとの共編に *Trade and famine in classical antiquity* (Cambridge, 1983) がある。

本書の構成は以下の通りである。

導入：F.についての歴史叙述
一章：空間、支配力、そして社会
二章：F.と、帝国の拡張
三章：何故F.はそこで停止したのか？
四章：F.の経済と社会
五章：圧迫下のF.
六章：F.の崩壊
七章：帝政後期における軍閥将軍と土地領主

導入において、W.は自らの問題意識を次のように述べる：（ローマに限らず）F.についての歴史叙述は、その叙述が為された国が辿った、F.に関する歴史的な経験が反映されている。ヨーロッパ大陸における領土拡張競争の過程において、国土は山河などの自然的なものによって象

徴的に囲われているとされた。続く帝国主義時代に英仏が経験した苦しい植民地戦争は、F.とは文明と未開とを分ける線であるとの単純な理解を生んだ。又、開拓期のアメリカ白人社会にとって、F.とは自分を招いている広大な地域への入口であった。F.は必然的に前進すべきものとされ、現地の人々の存在は、前進を妨げる敵であるという以上には、殆ど考慮されていない。これらの理解は、ローマのF.についての歴史叙述にも影響なしとはいえない。全ての歴史叙述がこのような傾向を有している訳ではないが、ローマのF.を一般化するに当たって古代史家を導きもしくは惑わせるような歴史叙述上の傾向があるといえる。我々が欠いているのは、系統立った原理であり、且つ、F.で起こっていたことの解釈と発展を含むような満足のいくモデルである。と。

さて、本書を紹介するに当たっては、内容の関連上、一章から三章をⅠ、四章をⅡ、五章から七章をⅢとする。Ⅰでは、ローマ人の世界認識を確認し、かかる認識が帝国拡張期のF.にどのように投影されていたのかを見た上で、更には前進を続けたF.が停止した理由が検討される。Ⅱでは、Ⅰの議論を踏まえ、W.独自のF.経済・社会モデルが提示される。本書の意義を考える上でも中核となる章なので、特に丁寧に紹介したい。Ⅲでは、このモデルの帰結として、帝政後期にF.が辿った変容が検討される。ここは具体例の提示が多くを占めるので、整理して紹介する。

Ⅰ

一章 W.は、ローマ人が世界をどのように見ていたのかを考えることから始める：

ローマ人の世界認識においては、先ずローマの支配によって組織されてきた領土（つまりイタリア及び属州）と、世界のイデオロギー的外縁である大洋オーケアヌスとがある。その間には広大な未知の地域がある訳だが、そこはローマ人にとって領土というよりは支配力の及ぶ空間であり、帝国の構成要素ではあったが属州として組織するには値しないとされるところであった。つまり、ローマ人の理解では、帝国は領土と、支配力の及ぶ空間という二部分から成り、我々が今日いうところのローマ国境とは両者間の境界線に当たる。ローマ人は後者を前者に併合するに当たっては「正式に宣告せられたる戦争（bellum iustum）」「信義（fides）」といったイデオロギーに則るものとしていたが、後者において支配力を伸張させるに当たっては何等の制限もしていなかった。

二章 続けて、ローマ人のこのような認識がF.概念にい

かに投影されていたのかを、帝国拡張期におけるF.について見ていく：

共和政期にはローマのインペリウムは全世界に及ぶとの考えが流布していたし、アウグストゥスにおいても、帝国拡張に恒久的制限を設けようとしていたとは認められない。「限りなき国土（imperium sine fine）」というイデオロギーは、善き皇帝というローマの常套句における中心的なものであった。

その上で、共和政末期からハドリアーヌス帝治期に至る間のF.における実際を見る。先ず、帝国の東と西はそれぞれ全く異なる世界に属していたことを確認する。ここからしても、帝国の統一的総合戦略というものは、そもそもありそうなものではない。この時代、フラーウィウス朝期に至るまで、ローマ軍は断続的に前進していたが、停止時にあってもその先への支配力伸張は常に意図されていた。

一般に、ハドリアーヌス以降、帝国は防衛的な新政策に転じたとされるが、それは疑わしい。というのも、軍の停止自体はハドリアーヌス以前にも往々にして見られることであるし、アルメニアからの撤退にしても、支配形態をアウグストゥス式に戻して、直接統治から間接支配に切り替えたものに過ぎないからである。帝国は防衛的であるどころか、常に支配力伸張を意図していた。更に、ここにはF.の曖昧さが見て取れる。ローマ人は、直接統治属州と間接支配領域との差異を殆ど不自然とは感じておらず、双方共にローマ人の拡張主義的傾向に適うものであったといえる。そして、これらのことは帝国東西双方で見られ、東西における戦略は明らかに異なるものであったにも拘らず、F.概念は著しく類似していた。

三章　ローマ人の意図がどこにあったにせよ、ハドリアーヌス以降、ともかくも全般的には軍は停止し、従ってF.もその前進を止めた。今日我々がローマ拡張の停止位置として知る地点、当時何故そこでローマのF.は前進を止めたのであろうか。本章において、W.はこの問いに答えようとする：

歴史上、本来戦略的F.と自然的F.はいずれも確固とは認識し難いものであり、実際のF.は民族的に混交した状態として、寧ろ「地帯（zone）」状を成していたと考えられなければならない。ローマ時代、ローマ人は総合戦略によって戦略的F.を完成し得たのか、又はそうし得ると考えていたのか。フラーウィウス朝期及びその前後に、統一的総合戦略に基づく合理的政策を通じてF.政策は発展していったという説がある。だが、この説は適切なものではない。当時における「戦略」についての洗練された概念の欠如、更には情報の慢性的不足によって決定の合理性は損

なわれていたのであって、総合戦略も、又それに基づく戦略的F.の存在もあり得ないからである。

では、我々が自然的F.と見なしてきたライン、ドナウ、ユーフラテスなどの各河川は、ローマの政策上どう位置づけられるのか、ということが問題となるが、考古学調査によれば、これらの河川は諸文化・民族の隔離を為し得るような自然障壁などではなく、寧ろ往来を促進するコミュニケーションラインであった。アラビアやアフリカのF.が、河川ではなく「道」、つまりコミュニケーションラインそのものであったことが、その何よりの証拠といえる。これらのラインは塁壁などで補強されていたが、それはコミュニケーションをローマの管理下に置くためであって、ローマ人と蛮族を分かつためではなかった。

それでは何故F.はそこで停止したのか。O.Lattimoreの中国北方F.についての研究によれば、F.とは征服領域の広さと統治経済との折衷の結果なのであり、不可避的に地理的分割線ではなく広範な移行地帯となる。これ以上にF.が前進すれば統治経済上不利益を被りかねない、つまり収支において支出が上回りかねないようなぎりぎりの(marginal)ところにF.は形成された。ローマ帝国各F.での考古学調査からは生態学的・人口動態学的な限界性(marginality)が確認され、各々での決定要因は類似している。全般的に、農耕地域から牧畜地域への移行地帯に当たる。F.がどこで停止するのかという決定が曖昧に見えるのは、F.の向う側の地域のこうした限界性故のことであった。そして、それ故に補給についての諸問題が生じ、コミュニケーションラインの必要性が生まれる。我々の知るローマのF.はこれらの結果なのであり、又、諸条件が変化した時点での更なる前進を抑制するものではなかった。

II

四章　ここまでに確認したこと、つまり、ローマ人の空間観、彼らの不断の拡張主義的傾向、経済上の限界性故にコミュニケーションラインを軸に地帯状を成すF.という把握を踏まえた上で、W.は独自のF.経済・社会モデルを提示する。F.モデルを提示するに当たって、W.は次の二つのテーマから考えている。㈠フロンティア駐屯軍にとっての補給の重要性と、その補給がいかにして為されていたのかという問題。㈡他方、補給はF.地帯からも取引や貢納の形で供出されていたが、そのことがF.の社会に与えた影響の問題、である。本章はこの二つのテーマに大別して紹介する：

(一)

三章で述べたように、河川はアクセスのための基本ルートであり、ユーフラテス河やドナウ河も第一には停止点ではなく「兵站上の（logistic）F.」であった。軍にとっては食糧の移入は不可避であり、軍への大量輸送は、市民の賦役や軍の部隊によって、主として内陸河川を経由して為されていた。経済上の限界性からしても、補給を不安定な地域市場に全面的に任せる訳にはいかなかったし、古代においては小麦の生産量も激しく変動した上、軍団が自前の耕地で自給自足をしていたとする説も今や支持されていない。こうしたことから、内陸河川を経由するF.駐屯軍への補給は、重要性が高かったのである。

いかにして補給は為されていたのかについて、それは帝国の責務であったとする従来説もあるが、最も確実性がありそうなのは、ヒスパーニア産オリーブ油の供給についての研究から出された説である。それによると、ライン河沿いの軍事拠点の多くは、ヒスパーニアの民間の船荷主やオリーブ農園主と固有の関係を有していた。これは、特別な独占権か国家助成による「統制商業」や「優先的商業関係」を推定させるに十分なもので、考古学資料も市場自由競争や開放市場の下ではあり得ないような「経済外的」な分布を示している。

興味深いことに、ライン河やブリタニアへの軍事輸送は主にローヌ河＝ライン河線を経由していた。輸送用アンフォラの分布状況から見ても他ルートの使用は小規模であり、大半は「特権賦与による方向付け（the privileged directions）」に従ってこのローヌ＝ライン線のような軍事ルートを経由していた。そのルート沿いには、商人やしばしば流通に関わっていたアウグスターレースの六人委員（seviri Augustales）による貿易について記した碑文が他所よりも集中的に見られる。ここから、これらの人物達は、軍隊への輸送・補給を請負っていた者であったことが窺える。多くの史料（e.g. Caes.*BG* 7,3,1）は、彼ら民間の請負人が軍の部隊に密着していたことを示している。

国家による彼ら交易人への助成及び統制の証拠は法史料に見られる。軍に供給する物品は非課税となることが仄めかされる（*D* 39,4,9,7）一方で、命ぜられた以上に荷を輸送した場合には納税義務があるとされる（*D* 39,4,4,1）。又、国家は軍事補給に限らず、穀物を扱う商人を優遇した（*D* 50,5,9,1）一方で、意のままに商人をあらゆる公的請負から締め出す権限を有していたのである（*D* 48,19,9,8）。こうした助成・統制が法史料に定式化されるのは、二世紀半ば以降だが、ティベリウス治期のピシディアにおける輸送手段の徴発に関する碑文（*JRS* 66,107-8）から、国家

による助成と統制の原則がそれ以前から存在していたことが推定される。

更には、このような法文の存在は、逆に彼ら請負商人が度々法を犯していたことを示唆している。軍に提供する物品は定量であれば非課税であったし、軍への輸送手段は国家が提供していたから、命ぜられた定量以上の荷を密かに混入させておけば、その余剰分を輸送ルート沿いやF.地域の民間市場に有利な条件で供給し得たのである。結果として、そうでもなければ商業的供給はあり得ないような、F.地域や輸送ルート沿いの民間市場に多くの物品が流入していくことで、属州F.地域は恩恵を被っていた。

(二)

第二のテーマを考えるに当たっては、先ず、ローマの商人や軍の担当者はいかにして補給品をF.地帯から集めたのかが問題となる。彼らが属州F.地域及びF.の向う側の地域から補給物資を集めていた事例は、史料にも見られる(e.g. Tac.*Hist.* 4,15 ; *Ann.* 4,73 ; *FIRA* 3,37)。属州内についてはともかく、タキトゥスなどの史料や碑文、パピルス文書などによれば、ローマの支配力はF.を越えて及び、F.の向う側の地域にいる現地商人からの購入や現地部族からの貢納による場合もあったことが窺える(e.g. Tac.*Ann.* 4,72 ; Hunt's Pridianum papyrus ; *ILS* 8855 etc.)。

各地での考古学上の成果は、これらのようなローマ・現地住民間でのF.に跨る共生・搾取に関する史料の記述を補強してくれる。例えば、ドナウ中流域のスエービ族にとって"villa"とは一連のローマ式建築を指す語であった。この"villa"の住人がローマの商人もしくは兵士であったのか、それともゲルマン王族であったのかは判然としないとはいえ、重要なことは、このようにローマ化された建築内部から大量のローマ工芸品が見つかったことである。これらはローマとの交易によるもの考えられており、史料に見られたような、F.に跨る共生関係を示している。もっとも、地域毎に研究の進展状況に差があり、アフリカとアラビアの両砂漠F.については、それ程はっきりしたことはいえない。

ところで、軍の必需品の内、どの程度がF.に跨る共生・搾取の所産であるかについては、決定する術はない。ただ、オランダ、アフリカ、ブリタニアの地から得られる印象としては、ローマが輸入していたものは家畜類で、軍はその巨大な需要を創出していた、といえるかもしれない。その需要は恐らく現地人側のストックを品質改良する誘因ともなったのである。ローマ側の輸出品の内で現地人側にとって最も魅力的であったものは、穀物であったと思われる。

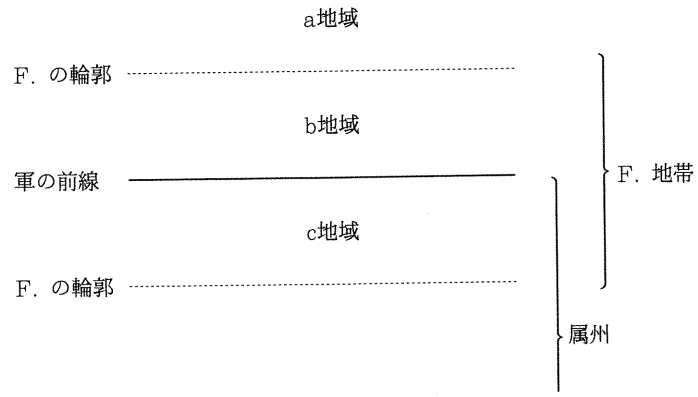
史料には、当時現地部族は穀物が不足気味であった様が見られるからである（e.g. Caes.*BG* 6,10,22 ; Tac.*Germ.* 14,26)。

状況証拠でしかないが、ライン・ムーズ盆地の生態学的地図からも、F.を跨ぐそのような共生関係が窺える。少なくとも、どのF.においても疑う余地のないことは、F.の両側の人々の間での社会的経済的結び付きが益々発展していったということである。Lattimore は、中国北方F.における塁壁や柵の目的を、現地人との取引による利益を最大とするためで、彼らを排除するためではないとしたが、ローマのF.においても同様のことがいえるのである。

そのように、ローマがF.を越えての取引を行うにつれて、F.地帯の両側がそれぞれの後背地とは異なった発展を遂げ、次の①②の結果が生じることになった。

①元来明確には認識し得ない移行地帯であったF.が、公的属州境及び軍の前線を越えた向う側へと跨り、F.地帯としての輪郭が明確に認識されるようになった。ローマ工芸品及び貨幣についての考古学的研究によれば、このF.地帯の内側にあって且つ軍の前線の外側の地域（図のb地域）では、ローマとの定期的取引による世俗的日用品が多く見つかっているのに対し、F.地帯の外側の地域（a地域）では、青銅、ガラス、銀製工芸品といった稀少で贈与

【F. 地帯略図】



＊この略図は、本書の説明及び図（*Fig.*34）を参考に、紹介者が作成した。

交換に関わるような物品が多く見つかっているが、日用品の類は殆どない。又、b地域では、「市場経済」が進んでいたとまではいえないまでも、ローマの貨幣が特に多く見つかっている。このように取引によって物品が通過していく「回廊地帯」として、F.地帯の輪郭の存在が認識されるのである。もちろん、三章で見たように、F.はあくまで移行地帯なのであって、F.地帯の内と外で生態学的・文化的・経済的に明確な区分が見られる訳ではなかったのだが。

②b地域において、ローマからの輸入品は現地有力者層の下に集積され、その物品の分配を統制することによって、彼らの支配力は強まっていった。例えば、オランダ北部とドイツ北西部では、ローマからの輸入日用品は主に集落中央の領主館（Herrenhof）に集積され、社会的・経済的生活はその周囲で営まれるようになっていたのである。その反面、有力者層以外の社会構成員は、稀に分配に与ったときの他には殆ど恩恵を被ることはなかった。

以上二点を踏まえて、更に先へ進めば、F.地帯全体は軍の前線に跨り、取引はその両側に影響を及ぼした。先述のように、b地域では世俗的日用品が多く見られる反面で稀少な物品を欠いているが、これは経済循環の中で稀少品が定期的に再利用され貴金属が融解されていたためである。それに対し、a地域では稀少な物品は見られるが世俗的日用品は殆どない。概して、b地域における遺物の種類は、分量こそ違うが、c地域農村集落におけるそれに類似する一方で、a地域のそれとは明白に異なっている。つまり、ローマのF.についての我々の経済モデルに、b地域への分配を含める必要があるのみならず、bc両地域にいた農村住民同士――彼らはすぐに有力者層によって独占されてしまうローマ産物品への強い指向を有していた――の同質化をも組み入れる必要がある。

bc両地域において、農村住民はそれぞれにとっての有力者層よりも物質的には生活水準が低く、生活上使用している物品の種類の上でも、それぞれにとっての有力者層との類似よりも農村住民同士の類似の方が強かった。ブリタニアとゲルマーニアにおける考古学調査によれば、bc両地域の農村住民は共にローマ文化の影響を殆ど受けていないのに対し、bc両地域の有力者層は共にローマ都市・軍事階級のようにローマ経済と結び付いていた。ベルギカにおける碑文調査は、属州内において、都市住民と農村住民との間にある文化的差異を顕著に示している。文化的な意味での移行地帯は軍の前線に跨って属州内にまで及んでいたのである。

高地モエシアでは、ドナウ左岸にローマ化の徴候が認め

られる一方で、右岸属州内にもローマのプレゼンスを欠く地帯の存在が指摘される。アラビアのF.は帝政後期においてはローマによる定植が活発であったが、その定植はトラーヤーヌス新道の西、つまり軍の前線の手前で突如終わっていた。ここに、軍の前線に跨るF.地帯の両側がそれぞれの後背地とではなく相互に同質化していき、F.地帯が後背地の中央政府からは異質化していってしまうことの典型例を見ることが出来る。帝政後期において、ローマがダーキア人、ゲルマン人、アラブ人などを多数移住させたのは、これらの地帯であった。

Ⅲ

このモデルによって説明されるF.は、その後いかに変容していったのであろうか。五・六章では、ドミナートゥスの成立から、この変容の様相が顕著に現れてくる五世紀初頭までを先ず扱う。五世紀には、東帝国ではF.は殆ど変化もなく存続していたが、西帝国ではF.の存在が度々不明瞭となる。この曖昧さが、西方における帝国から後継蛮族諸王国への推移を説明してくれる。この「蛮族（barbarian）」という語は曖昧に用いられている嫌いがある。ローマに入ってきた非ローマ市民を指す語が他にないためにこの語を当てるが、彼らは既に長期に渡ってローマと交流してきており、属州内の住民ともかなり同質化されていた。四・五世紀に行われた戦いは、実際のところ、圧迫への適応によって変容していった文化へと、F.地帯の人々が漸次同化していく過程に他ならず、地域毎に程度の差はあるが、ローマ人の隣接住民に対する政治的態度やイデオロギーの一貫性、並びにその住民達の帝国への同化については、一般的関係を提示することが可能である。

五章　先ず、本章において、W.はF.を細分し地域毎に詳しく検討する。それを整理すると、どのF.であっても概ね次のような状況にあった：

三世紀末から五世紀初頭には、隣接諸部族による圧迫がローマを悩ませたが、その形態は殆どが小規模集団による絶え間ない襲撃・略奪であって、大規模な侵攻軍といった体のものではなかった。四章で述べたように、F.を跨いでのコミュニケーションは活発であったが、これらの諸部族はローマの管理下に置かれなければしばしば破壊的な行為にさえ走ったのである。故に、ローマがF.地帯に構築した防衛体制とは、コミュニケーションラインとそれに点在する監視拠点によって彼らを絶えず監視するといった従前のものであって、今日しばしばいわれているように組織立った防衛網が築かれたといい得るだけの証拠は殆どない。

更には、ローマがF.で防衛的であったともいえず、寧ろF.以遠の地域への伸張は意図され続けていたかに見える。

又、かかる監視体制の維持にあっては、正にこれらの諸部族自体が用いられていた。アラビアで砂漠路の監視に当たっていたのはサラセン人であったし、西方では、ゴート族などを属州F.地域に移住させ、彼らに防衛を担わせていた。これら諸部族の大半は、分裂し相争う状態にあったから、このローマの政策は、差し当たり効を奏していたが、他方、その政治的発展・統合をも促し、ローマにとっての潜在的な脅威を増大させていった。いわば、この時代F.が決壊したとされる諸事件は、F.の弱体化を露呈するものというよりは、ローマの対応の拙劣さを露呈するものであった。待遇の酷さや彼らへの侮り、計画性の欠如、特に、諸部族を属州内に入植させるに当たっての無定見は後に致命的なものとなる。だが、当面はF.の決壊は破滅的なものではなく、直ぐに回復されたのである。

水面下では、ローマは軍事面でこれら諸部族への依存を益々強め、彼らの政治的発展も益々促進されていった。属州内に移住した諸部族は、F.地帯の両側の同質化が進んでいたために、何等違和感なく属州F.地域と一体化していった。やがて、彼らは軍事面での貢献を盾に、政治的な権利をもローマに要求し始めるのである。

六章　四章で提示したF.のモデルは、時代と共に変容していったが、これは所謂蛮族侵入に伴う変容であったといえる。三世紀末から五世紀初頭におけるF.の変容は、どのような実態を有するものであったのか。これを検討することが本章のテーマとなる：

一般に、この時代に、蛮族の圧迫によってF.が崩壊したと見なされることが多いが、F.の崩壊という概念は、線状のF.という紋切型の先入観の副産物であるといえる。確かに、ローマ側の史料は、アドリアノープルの大敗という衝撃もあって、蛮族侵入を完全に悲観的でネガティヴに捉えている。しかしそれも、ローマ上層の人々が、ローマは世界を統治するというイデオロギーを保持し、蛮族との対等的共存を認めなかったことに由来するものであろう。少なくとも、ローマ側の史料に、F.の様相が正しく投影されているとはいえない。

この時代のF.が呈していた様相を検討するに当たっては、蛮族がローマに加えていた圧迫、所謂蛮族侵入の性格を正しく見据える必要がある。この蛮族侵入といわれる四・五世紀の民族移動は、考古学的・生態学的に見て、小集団による浸透という緩慢なもので、これらも組織と統一を欠き多数の小集団に分裂していた。侵入の一般的性格はこのようなものであって、アドリアノープルの戦いに代表的に

見られるような大規模で侵略的な様相は、劇的ではあるが孤立的な一事件として見なされるべきである。ローマ属州内に浸透していった集団にしても、F.に跨るコミュニケーションを通じて、既に数世紀にも渡ってローマと接触してその影響を受けており、ローマの識閾外から突如出現した訳ではなかったのである。

この民族移動の起因は、寧ろ人口動態学的に解釈されるものである。即ち、F.が停止し安定すると、いわばF.文化というべきものが発展し、人口も増大したのだが、気候の変動などもあって食糧需要が逼迫し、ローマ側へと人口の動きが生じたのである。四章で提示したような、正にローマの構築になるF.の透水性故に、ローマはこの人口の移動を統制することは出来なかった。ローマに合法的に認められて属州内に入植した蛮族も多かったので、F.に跨っての社会的・経済的・文化的交流は更に活発なものとなり、F.地帯の社会は益々均質化していき殆ど見分けがつかなくなっていった。

ところで、四章のモデルにあっては、軍の前線の両側の有力者層同士、農村住民同士が同質化していく一方で、上下間は分離化していく傾向が見られたが、この上下分離化はローマの支配政策に適うものであって、ローマの都市・軍事制度はこれを促すものであったといえる。とりわけ、現地人新兵を現地の有力者とは分離して徴募し、出身地域とは別な地域で兵役に就かせるという原則は、その最たるものであった。しかし、四世紀には、特に西方において、地域的な簒奪や帝位後継者争い、コーンスタンティーヌスによる野戦軍の創設などによって、主としてライン河方面のF.からの兵力引抜きが為されたときに、F.で不足した兵力を当該地域の現地人新兵を以て補ったために、この分離原則は守られなくなり、現地人新兵はそれぞれにとっての有力者の指揮下で兵役に就くことになった。こうして、F.社会の上下構造は分離から一転して結合していくことになる。

四章のモデルでは、F.地帯の現地有力者層はローマの制度に組み込まれ、いわばローマの一員として農村住民を支配していたのだが、上下構造が結合することで、現地有力者はローマからは独立化していき、農村住民を直接的に支配下に掌握していった。五章で見たように、ローマは彼らを軍事的に重用していたから、有力者はF.社会における支配力を更に強めていったのである。

このような制度上の変容と並行して、先述のような人口の増大・流入と食糧需要の逼迫といった状況が見られたが、この状況はF.地帯に緊張をもたらし、住民の派閥化や対立を促した。F.地帯におけるローマの実質的支配力は低

下していたから、住民は現地の有力者達に保護を求め、その支配下に入っていった。こうして、F.社会における核形成が進んだが、このことは有力者による社会支配の増大を意味していたのである。

核形成のあり方は、三タイプに大別出来よう。①入植してきたゲルマン王族・有力者層が中心となって、ガリア＝ローマ人農村住民をも吸収して形成されたもの。②ローマ人ウィラ所有者の大半が去った後に、残された農民・小作農が自衛のためにウィラに移って集住し、やがてその中から中核的存在となる者が生じて形成されたもの。③ごく少数の例外ではあるが、残留した富裕なウィラ所有者の下に貧農や小作農が保護を求めて集まり、軍事化していって形成されたもの。このようにして、F.における社会的階層化が進展していく。これらが後継蛮族諸王国の基礎となっていくのである。

この頃、ローマ人がどう見ていたにせよ、カエサルやアウグストゥスに始まる征服とは逆の過程が進んでいたといえる。今や蛮族側の支配力がローマ奥深くへと伸張していた。依然ローマは蛮族側へのアクセスを無制限且つ開かれたものと見なしていたが、蛮族側も同じ見方を逆にして採用していた。蛮族側の有力者達は、ローマ中央にアクセスする権利を要求していたのである。ここに、西方において、ローマのイデオロギーと現実との間の完全なコントラストを見るのである。

七章　最後に、W.は、五・六章以降の時代を見る：

先ず、五世紀以降、各F.の最後の日々を辿る。東西のF.は全く別の運命を迎えることになった。東方では、殆ど損なわれることなくビザンツへと移行した。西方では、ローマが撤退していくにつれて、後継蛮族諸王国へと推移していった。ここでは、その時代の諸変化の内、農村地域における変化と軍隊における変化に焦点を絞る。特にこの二領域での諸発展こそが、ローマ帝国から蛮族諸王国への移行を和らげたからである。

農村においては、大地主が軍事化していく傾向と、軍人、特に指揮官クラスが軍務地の土地に定着し、地域の有力者となっていく傾向が見られた。両者共、貧農を従え、中央政府からは益々独立化していった。軍隊においては、F.への圧迫が強まる中で、部隊は都市や要塞に拠って、より孤立化し核化していった。兵士達の指揮官に対する忠誠は、公的な諸権威を介しての契約に類するものではなく、個人的なものとなり、両者の関係はパトロネイジに似た私的なものとなっていった。五世紀以降、帝国外縁の農村地域は、こうした集団の支配下にあったといえる。

本来、前者が土地領主（landlord）、後者が軍閥将軍

(warlord) に当たるといえようが、国家軍 (state army) の崩壊に伴い、両者間の区別は曖昧となっていく。ここでは、中国・清朝末期以降に見られた軍閥 (warlordism) との比較によって説明出来るであろう。ローマにあって、ローマの行政・法が蛮族王国と呼ばれるものへの連続性を保ち得たのは、この両者の関係によっていたのである。

本書の意義は、四章でW.の提示したF.経済・社会モデルに大部分集約されているといえよう。我々は、ローマのF.における経済的社会的諸現象を、このモデルに基づいて極めて整合的に理解し得るのである。又、考古学、人類学、生態学、人口動態学などの厖大な成果 ― これらはしばしば文献史料とは正反対の結論を導き出す ― をふんだんに援用している点も特筆されるべきである。

もちろん、不満がない訳ではない。W.自身も序文で認めるように、本書の成立事情からして、議論が西方に偏ったことは否めない。特に五章以下の帝政後期を扱う部分の記述は、西方F.の分析がかなりの分量を占める。W.の説明では、東方F.は殆ど損なわれることなくビザンツへと移行した、として体よく棚上げされている。だが、W.のモデルは、帝国全域についての一般化を目指したものであるはずだから、こうした説明では不十分ではあるまいか。ビザンツへと移行した後、ビザンツのF.がどのように変容していったのか、又、F.はビザンツ史上どのような意義を有していたのか。このような問題設定も為されていれば、より充実した内容となっていたであろう。

しかし、W.は現在までの研究を幅広く踏まえつつ、極めて論理的で一般化されたモデルを我々に提示してくれている。今後、様々に研究が為されていく上で、このモデルが批判的に摂取され検討されていけば、従来とは又違った議論の深まりが期待出来るであろう。例えば、古くから重大問題であり続けた「ローマ化」という問題を考えるに当たっても、このモデルは示唆的であり、魅力的である。ローマのF.は、ローマ属州外地域の住民がローマ的要素を受け入れていくに当たっての、いわば「準備」をする場であったといえるからである。「ローマ化」についての議論は属州内、特に「都市化」の問題と関連付けて為されることが多かったが、農村地域についても議論が為されていく必要があるし、そのためには、W.のモデルのように、F.をも視野に入れておく必要があるであろう。

本書のような総合的理論的研究の常として、今後、個別的実証的研究からの反証・反例が提示されることは十分に考えられる。だが、本書を一つの土台として、様々に議論が深化していき、ことによっては本書が乗り越えられてい

C・R・ホイッタカー『ローマ帝国のフロンティア』（柴野）

くことは、恐らくW.にとっては望むところなのではなかろうか。

（立教大学大学院史学専攻博士課程前期）